

〔修士論文要旨〕

## 近世的観光の生成と展開

伊藤 暢 行

江戸時代の民衆、特に一八世紀以降の日本の一般民衆は旅行好きであった。「可愛い子には旅をさせよ」「一生に一度は伊勢参り」などの言葉がそれを物語っている。古代・中世の日本においては、貴族や武士、商人や一部の有力農民が旅の主体であったが、江戸時代に入り、民衆の生活が向上し、街道の整備が進むことによって多くの民衆が旅に出ることが可能になった。<sup>1)</sup>

江戸時代の旅人たちが書き残した旅日記を読んでもみると、出発地に關係なく、そのルートは皆一度通った所は必要が無い限り二度通らない、循環的性格を持っていることがわかる。<sup>2)</sup> また、旅人たちは共通して伊勢参宮と畿内見物をしている。その中でも伊勢参宮後の行動に二つのパターンがあることに気付く。一つは伊勢から紀伊半島を南下し熊野へ向かい、西国三十三箇所巡礼を行う者、もう一つは伊勢から伊賀方面若しくは近江へ向かい、京都・奈良へ行くものに分けられる。循環ルートの原因として、一生に一度の大きなイベントであった旅において、同じ道を二度歩く不利益よりも、一箇所でも多くの見知ら

ぬ土地を訪問する利益を追求したいという感情が働いたこと、また「聖性」の意識が考えられる。<sup>3)</sup>

旅の目的地の一つに奈良が挙げられるが、収集した日記の中で奈良が登場する最古のものは元禄六(一六九三)年のものであった。この前後、東大寺復興という大事業があり、また多くの名所案内記が出版されたことから、この時期が奈良が観光ルートに編入される決定的な時期だったと思われる。

旅日記を読んでもいくと、旅人たちは出発前に入念な事前学習・準備をしていたことがわかる。旅人は祖先の日記や地域に残る日記を読み旅の準備をし、また自分の興味のある名所・旧跡の情報を仕入れていた。観光地に存在する案内人が驚くほど、事前に学習していた旅人もいた。

従来、江戸時代の旅は「信仰を名目とした遊樂目的のもの」と説明されてきた。<sup>4)</sup> 確かに旅日記を読むと寺社参詣しながらも各地の名所を見物し、名物を食べ、芝居を見るなど観光らしいことをしていること

がわかり、通説の通り参詣と遊楽が入り混じったものと考えられることができる。しかし、そういった中でも旅先で最先端の農業技術や土木工事、建築、海外の風俗など様々な事柄について学習しようとしている旅人がいる。遊楽が主体か、それとも学習が主体か、旅日記の記述からはわからないが、江戸時代中期には既にこういった形の旅が存在しており、江戸時代の旅は「信仰を名目とした遊楽目的のもの」の一言では片付けられないものだったと思われる。

旅日記の表題を見ると、「伊勢」や「参宮」という語句を掲げる日記が多い。また先に述べたように、旅人は確実に伊勢に立ち寄る。幕藩体制の建前としては、民衆は無断で村や家を離れることは許されなかつたが、伊勢参宮と湯治の旅は例外として許されていた。そのため「伊勢参宮」は江戸時代の民衆にとって、日常生活から離れる格好の方便であった。

だが日記を読むと、伊勢では参宮よりも他の出来事をより詳しく書いている。それは御師のもてなしであった。村では見ることでできないような豪華な食事や寝具を提供され、常に駕籠に乗り、土産も持たされた。伊勢では参宮よりも寧ろ普段の生活では決して体験することができない、こうした出来事を楽しむことが伊勢を目指す動機になっていたのではないだろうか。実際に「伊勢参宮 大神宮へもちよつと寄り」という川柳も詠まれていることから窺える。

旅人を迎える側にはどういった動きがあつたのか。まず現地の人々は旅人に何を見てもらいたかつたのか。奈良に限定して考える。

江戸時代、奈良・大和に関する多くの案内記類が出版されたことは先に述べた。それらは現地の人々への取材によって、また文献調査によって作られたものであり、これを見れば現地の人々が旅人に何を期待したのかかわかるだろう。それらを見ると、古代への憧憬的な雰囲気が出てくる。興福寺や元興寺の焼失後であっても、それらが往事のままの姿で描かれている絵図も存在する。江戸時代の日本では国学の隆盛に伴い古代回帰の風潮が広がっており、古代の都であった奈良では、特に古代というものを意識させたかつたのだろう。

しかし旅人たちは堂の名称や寸法、形など、全く違うものに興味を持っていくようだ。学者や知識人は大和に点在する古代の遺物・遺跡や伝説に非常に興味を持って歩いてしたが、通常そういったものは意識されてはいないように思える。

最後に近世に入って観光地となつた伊勢や畿内において、代表的な観光名所である寺社などはどのような活動をしていたのか考へる。

まず伊勢の御師だが、近世になり民衆の寺社参詣が盛んになると、神職の性格を後退させ、商業活動を活性化させる。先に述べた通り、御師は自宅に旅人を泊め、旅人は食事・寝具・駕籠の提供、神楽奉納など数々のもてなしを受けた。旅人はそれを有難がつて村に帰つていき、村の住民たちに伊勢の話を広めた。御師は見事に宣伝に成功しているのである。旅人に夢のような体験をさせることで、御師の下に再び客が集まってくる。伊勢御師は、まさに現代の「旅行サービス業」の原型と言つて良いだろう。

次に寺社だが、かつて広大な荘園を持ち、権力を握っていた寺社も荘園の解体や末寺の独立などで、経済的に困窮する。そこで寺社は出開帳や拝観料を取り財政を支えるための努力をしていた。

最後に公家である。多くの旅人は京都を訪れると禁裏に赴いていた。そこで白河大納言から金銭を払って接待を受ける。これも狙いは伊勢の御師と同じものであったと考えられる。

「観光」という言葉は、元々は「易経」に見られる言葉が基になっており、「国の光」を観る、つまりその土地の優れた文物を観るという意味がある。その語の通り、江戸時代の旅人たちは現代の観光客よりも実に詳しく各地の文物を見物して歩いた。「観光」という言葉は江戸時代の日本には存在しなかったが、当時の観光はその語の通りのものであったと言って良いだろう。

(1) 新城常三「新橋社寺参詣の社会経済史的研究」

(2) 高橋陽一「多様化する近世の旅―道中記にみる東北人の上方旅行―」

〔歴史〕 九七

小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷」〔筑波大学人文地理学研究〕 一四

小松芳郎「道中記にみる伊勢参詣」〔信濃〕三八―一〇 桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」〔駒沢史学〕三四 などの研究がある。

(3) 高橋陽一 前掲 2

高橋徹「まればと、巡礼、ノークョーさん」〔講座日本の巡礼第三巻 巡礼の構造と地方巡礼〕 岩鼻道明「道中記にみる出羽三山参詣の旅」

〔歴史地理学〕 一三九

(4) 林亮勝「元祿の大仏殿再興について―將軍家のかかわりを中心として―」

〔南都佛教〕 四三・四四 〔奈良市史 通史三〕 など

(5) 新城 前掲 1

山本光正「旅日記にみる近世の旅について」〔交通史研究〕 一三 など